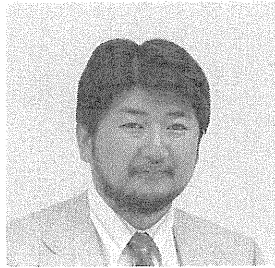


バイオグリッド基盤を実現

阪大が中国科学院と共同で展開



大阪大学サイバーメディアセンターは、独自に開発したグリッドコンピューティング技術の成果を基に、中国科学院微生物研究所（情報ネットワークセンター）と共同で、バイオリサーチのための国際的なグリッド研究基盤を構築する。24日、日本側からサイバーメディアセンター副センター長の下條真司氏（情報科学研究科教授）、中国側から微生物研究所主任研究員の馬俊才氏が会見した。

研究基盤の構築には、次世代ITと目されているグリッド技術と、IPv6ネットワーク技術（インターネットの次世代通信プロトコルとして開発された技術で、より安全・高機能な通信環境が実現できる）を応用し、阪大サイバー所有の

高性能クラスシステムと、中国・微生物研究所のクラスシステムを統合し、データベースの相互利用やバイオ分野でのデータの共同解析等を可能とするIT環境を実現する。

手始めとして、まず日中両国のグリッド環境を構築し、固有種に関する中国の生物資源データベースを検索するシステムを構築している。中国は哺乳類480種、植物2万7000種という地球全体の70%以上の生物種を保持する巨大多様性国家である。なお、この共同研究のIT基盤部分には文部科学省ITプログラム「スーパーコンピュータネットワークの構築（バイオグリッド・プロジェクト）」で開発された研究成果の一部が活用されており、下條教授は同プロジェクトのリーダーでもある。

し、固有種に関する中国の生物資源データベースを検索するシステムを構築している。中国は哺乳類480種、植物2万7000種という地球全体の70%以上の生物種を保持する巨大多様性国家である。

化されてきた。